

堀切菖蒲園と題経寺の文化財

交通及び案内図

堀切菖蒲園（堀切2-19-1）

京成線堀切菖蒲園駅下車 徒歩約15分

題経寺（柴又7-10-3）

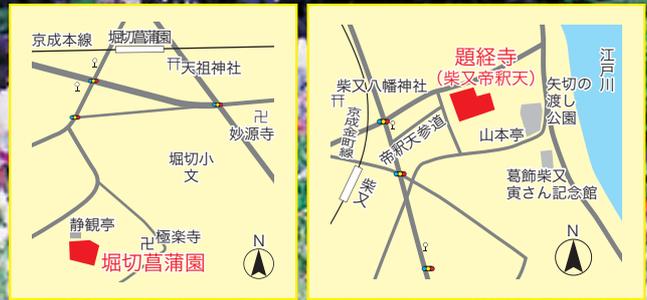
京成線柴又駅下車 徒歩約3分

JR小岩駅より京成バス「金町行/戸ヶ先行」にて15分、

柴又帝釈天前下車

JR金町駅より京成バス「小岩行」にて4分、

柴又帝釈天前下車



堀切菖蒲園

堀切菖蒲園〈区指定文化財名勝〉

堀切は、日本で最初に遊覧形式の花菖蒲園が誕生した地です。当地域での花菖蒲栽培の由来は、室町期堀切村の地頭が栽培したことに始まる説、江戸文化期(1804~17)堀切村の百姓伊佐衛門が「十二単衣」「羽衣」「竜田川」等の品種を集めて栽培したことに始まる説があります。

堀切の菖蒲園の特色である小高い築山と広々とした花菖蒲田は、江戸時代に多くの浮世絵師たちの格好の題材となり、市中に広く紹介され、江戸近郊の新名所観光地として文人墨客の訪問するところとなりました。この頃、旗本で、自ら菖翁と称した花菖蒲愛好家松平定朝が花菖蒲の単独書『花菖培養録』を著します。また堀切村小高園宛に尾張藩主徳川斉荘より「日本一菖蒲」「艸花」と書かれた2幅の親書が贈られるほど、脚光を浴びました。江戸末期には、小高園・武蔵園、明治期に入ると堀切園・観花園・吉野園などの各菖蒲園が次々と開園しました。明治維新後、花菖蒲は日本を代表する花として"HORIKIRI TOKYO"の名で欧米に紹介されました。

昭和にはいり、進行する都市化や戦争の影響で菖蒲園は相次いで廃園します。戦後唯一復興を果たしたのは堀切園で、東京都の管理を経て、区立堀切菖蒲園として存続し、昭和50年(1975)区の名勝に指定されました。

現在、堀切菖蒲園の花菖蒲は、約200種6000株がみられ、江戸期から続く古品種もあります。花菖蒲の見頃である6月には「葛飾菖蒲まつり」が開催され、様々な催しもあり、町全体がにぎやかに彩られます。花菖蒲は現在も葛飾区を代表する花となっています。

題経寺の文化財

日蓮宗経栄山題経寺は、千葉県中山法華経寺の門末で、寛永6年(1629)禅那院日忠上人・題経寺日栄上人のもとに創建された寺院です。一般には「柴又帝釈天」の名で親しまれています。

題経寺には、開祖日蓮聖人御親刻とされる帝釈天の板本尊がありましたが一時所在不明となっていました。安永8年(1779)春、第9代亭貞院日敬上人が偶然本堂の棟上より発見したことから、この庚申の日を題経寺の縁日と決めました。近世以来、病気や天災などに関する板本尊の霊験譚は多く語り継がれており、年間6日ほどある庚申の日は現在でも多くの参詣者で賑わいます。また、題経寺は葛飾区指定・登録の文化財が数多くあり、柴又を訪れる際は



題経寺（柴又帝釈天）

是非見学していただきたいと思います。

① 題経寺（柴又帝釈天）諸堂内及び二天門建築装飾彫刻一括〈区登録有形文化財〉

帝釈堂(大正4年)、祖師堂(昭和30年)、二天門(明治29年)の内外に施された木彫浮彫装飾。とくに帝釈堂は法華説話を題材とした彫刻で、設計林門作、棟梁坂田留吉の指揮下に彫刻師10人が結集して行われました。大正6年に着工し昭和9年に完成。

② 題経寺（柴又帝釈天）絵馬4点〈区登録有形文化財〉

現在、彫刻ギャラリー内に展示されています。絵馬4点は、明治2年(1869)「御影出現」、同7年「参詣」、同16年「御影出現・貸傘奉納」、同32年「御影出現・噴泉」の絵馬が順次奉納されたもので、当時の帝釈天のにぎわいと信仰を物語る貴重な絵馬です。

③ 題経寺（柴又帝釈天）出現由来碑1基〈区指定有形民俗文化財〉

弘化2年(1845)に作成され、現在、お札頒布所の裏にある石碑です。碑文の内容は、板本尊発見の由来や帝釈天の功德を刻してあり、近世末期に残された題経寺の由緒資料として貴重です。

問い合わせ先

*堀切菖蒲園

開園時間：午前9時から午後4時30分まで
(菖蒲まつり中は開園時間を延長)

休園日：年末年始

電話番号：03(3693)6636 [公園管理所]

*題経寺（柴又帝釈天）[彫刻ギャラリー]

拝観時間：午前9時から午後4時まで

拝観料：大人400円 小中学生200円

休園日：(庭園のみ) 12月27日～1月3日

電話番号：03(3657)2886